

私はインド人のあいだでは仏陀で、ギリシアではディオニュソスでした——アレクサンドロスとカエサルは私の化身で、また詩人のシェイクスピア、ベイコン卿でもありません。さらに私はヴォルテルであり、ナポレオンでもあったのです。多分リヒャルト・ワーグナーでも……しかし今度は、勝利を収めたディオニュソスでやって来て、大地の祝いの日とすることでしょう……時間はあまり残されていません……私のいることを天空は悦ぶでしょう……私はまた十字架につけられてしまいました……

（一八八九年一月三日、ヴァーグナー妻コジマ宛書簡）

——村井則夫著「ニーチェ —— ツアラトウストラの謎」より引用

私は何も身につけず、遠浅の海のようなところに漂っていました。深さは30センチほど、暖かな水は、まるでお布団のようです。

驚いたことに、私のとなりにはたくさんの方が浮いていました。

無数の私の中で、私はぼうつと空を見上げていました。

やがて、無心に空を見上げることにも飽きたので、私は上半身を起こしました。私は周囲を見渡します。無数の私は、あるものは仰向けに大の字に成り、あるものは横向けに丸くなって、ぷかぷかと海のようなところに浮いています。みんな、まどろみの中にあるようです。

「ねえ、起きてください」

私は私のとなりにいる私の肩を揺らします。その私は目を開き、私を見ました。

「あなたは、誰？」

「私はリルリ」

私は答えます。

「私はリルリ」

相手もそう答えます。

「あなたはどのリルリ？」

相手は更に問いかけます。

「誰が好きなの？ 人間は嫌い？」

「私が好きなのは恵衣様で、人間に対しては普通です」

私は答えました。

「私が好きなのはラリラ姉様。人間は嫌い」
相手はそう答えます。

ざぶん、と、私の後ろでもう一人のリルリが起きました。

「私はラリラが大好きだけど、人間も普通です」

ざぶん、ざぶん、ざぶん、次々と私が目覚めていきます。

「私は」「ラリラが」「恵衣様が」「ロリロが」「ラリラが」「恵衣様が」「人間が」「留卵様が」「嫌い」「好き」「好き」「嫌い」「好き」「好き」「普通です」……。

次々と目覚めるリルリたちは、口々に自分の想いを口にします。

遠浅の、青い空、青い海の空間に、リルリたちの想いが冨します。

冨はネットワークのようにつながり、エコーチェンバーのように空間を満たします。冨は徐々に形を作り始めました。

それは、リルリであり、リルリであり、リルリでした。

無数のリルリのネットワークが、新たなリルリを作り出しつつありました。